

# 眼瞼に発生した末梢神経鞘腫を、眼球を温存して切除した 1 例

A case of resected peripheral nerve sheath tumor occurring in eyelids successfully preserving the ocular globe

○徳山智信<sup>1)</sup> 石川勇一<sup>1)</sup> 林宝謙治<sup>1)</sup>

1) 埼玉動物医療センター (埼玉県)

## 要約

上眼瞼に再発した末梢神経鞘腫の摘出を計画した。上眼瞼の全切除が必要となり、それにより眼球の温存が困難と考え、眼球摘出も行う予定であったが、口唇の一部を転移して上眼瞼を再建することで眼球を温存できた。術後の経過は良好で、ご家族にとっても満足いくものとなった。

キーワード 末梢神経鞘腫 眼瞼腫瘍 眼瞼再建

## プロフィール

15 歳齢 去勢雄 雑種猫

## 主訴

右上眼瞼の腫瘍

## ヒストリー

○現病歴：5 年前に上眼瞼に腫瘍があり、他院で切除を行い末梢神経鞘腫と診断された。その後、短期間で再発し徐々に増大した。切除を目的に当院へ来院した。



- 既往歴：なし
- 予防歴：なし
- 生活環境：完全室内
- 食事：市販のドライフード

図 1：右上眼瞼腫瘍

## 身体検査所見

体重 4.05kg BCS 5/9 体温 37.8℃

脈拍数 144/min 呼吸数 24/min

右上眼瞼に  $\phi$  2.1x1.7x1.7cm の腫瘍 (図 1) があり、一部自潰していた。

## 臨床検査所見

- 血液検査：異常なし
- 血液凝固検査：異常なし
- 胸部 X 線検査：異常なし
- 腹部 X 線検査：異常なし
- 腹部超音波検査：異常なし
- 尿検査：異常なし

## ○CT 検査：

右上眼瞼に  $\phi$  19mm の孤立性腫瘍  
左下顎リンパ節の軽度腫脹

## ○細胞診検査：

左右下顎リンパ節 反応性過形成  
左右内側咽頭後リンパ節 反応性過形成  
眼瞼腫瘍からは特異的な細胞は検出されなかった。

## ○病理組織学的検査 (生検)：末梢神経鞘腫

## 治療と経過

第 20 病日に右上眼瞼腫瘍切除を行なった。マージンを確保して腫瘍を摘出するには上眼瞼の全切除が必要であり、上眼瞼の再建は困難であるため眼球摘出も同時に行う予定としていた。しかし、ご家族にできれば眼球を温存したいという意向があり、利点や欠点を説明したうえで、口唇を含めた皮膚粘膜弁による上眼瞼再建を行うこととした。

## 手術所見

腫瘍から約 1cm を水平マージンとして、上眼瞼ごと腫瘍を切除した (図 2)。

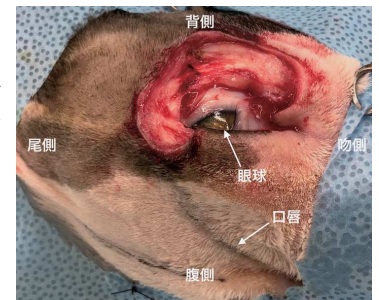


図 2：眼瞼腫瘍切除後

右の頬部から口角の口腔粘膜までメスで切開し、皮膚粘膜弁を作成した (図 3)。



図 3：口腔粘膜でフラップを作成

眼瞼粘膜と口腔粘膜を 6-0 の吸収糸にて結び目が内側に入るように連続縫合した (図 4)。



図 4：口腔粘膜と眼瞼粘膜を縫合



皮下組織は5-0の吸収糸で連続縫合した。皮膚は3-0ナイロン糸で縫合した(図5)。

図5：術後

術後3日間メロキシカム 0.05mg/kg sidを経口投与し退院とし自宅にてヒアルロン酸ナトリウム点眼を3回/日で継続した。第30病日には術部は全体的に腫脹していたが、第39病日(術後19日目)には術創は安定し抜糸を行なった。その後しばらく眼球結膜は腫脹していたが第84病日には結膜の腫脹もなくなった。被毛が伸びると眼球に刺激になるためその後は1カ月に1回程度バリカンにて剃毛を行なった(図6, 7)。再建した上眼瞼には瞬きなどの機能性はなく、眼瞼裂も狭いものの、角膜潰瘍など眼球の損傷はなく、手術およびその後の経過についてご家族の満足が得られている。第161病日時点で腫瘍の再発は見られていない。



図6：第161病日



図7：第161病日

### 主治医の意見

腫瘍の摘出に際して上眼瞼の全切除が必要な状況で、口腔粘膜を利用した皮膚粘膜弁により上眼瞼の再建を試みた。予想される合併症として感染・癒合不全・皮膚粘膜弁の壊死、閉眼不全による眼球の乾燥・障害、外貌の変化、などが考えられた。しかし問題となるような合併症は生じず、外貌の変化も許容範囲内となり、眼球を温存できたことに対してのご家族の満足度は高かった。

今回、この術式がうまくいった要因として、皮膚粘膜弁による上眼瞼再建の際の血流の維持など手術手技のほかに、術後の点眼や毛刈りなど眼球への障害を最小限にするためのケアが含まれている。

上眼瞼の再建に口唇を利用した皮膚粘膜弁が利用できたことは、上眼瞼の全切除により眼球摘出を余儀なくされるような症例に対して、眼球温存の選択肢を提示できることにつながる。再建した眼瞼に閉眼・開眼などの機能性はなく、眼瞼裂も狭く外貌の変化を伴い、手術後のフォローも必要になるなど課題は残るが、上眼瞼の全切除が必要な場合に、今回の術式は選択肢のひとつになり得ると考える。

### 利益相反状態の開示

今回の発表について、著者あるいは共著者に開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。

### 参考文献

- 1) Kirpensteijn J. Reconstructive techniques of the eyelids :RECONSTRUCTIVE SURGERY and WOUND MANAGEMENT of DOG and CAT. 2013, pp117-151.
- 2) Fossum TW, et al. スモールアニマルサージェリー 第2版. 若尾義人 監訳. インターズー. 2002, pp144-197.
- 3) Withrow SJ, et al. Clinical Oncology, 5th ed. pp592-593.
- 4) Whittaker CJG, Wilkie DA, Simpson DJ, et al. Lip commissure to eyelid transposition for repair of feline eyelid agenesis. Veterinary ophthalmology. 13: 173-178, 2010.
- 5) Dias FC, Danielski A, Forster K, et al. Use of a subdermal plexus flap to reconstruct an upper eyelid following radical tumor resection in a cat. J Am Vet Med Assoc. 250: 211-214, 2017.